

# 情けは民の為にある



## ハツ場ダムの歴史と未来

～個人向けダム見学会に参加して～

葛飾区民記者「かつしかPPクラブ」

隅田 昭

## まえがき



ハツ場（やんば）ダムは群馬県吾妻郡長野原町にあり、紅葉の景観が鮮やかな吾妻川の中に位置し、2020年3月の完成を予定している。

マスメディアで大きく報じられた機会は、過去に3回ほどある。

はじめは昭和40年代、着工する際に地元の川原湯温泉の住民が、反対運動を展開した時期だ。

次が民主党政権交替時に、国土交通大臣が方針転換をし、ダム建設を棚上げした平成21年ごろである。

そして昨年は台風19号の豪雨により、10月15日に貯水位583mで満水に達し、再び話題を呼んだ。

記者は試験湛水前の2019年6月に、同ダムを訪ねているが、紅葉も終わりかけた12月の個人向け見学会にも参加した。それを元に国政や世論に翻弄され続けた、ダムの歴史と将来について考察する。

## もくじ

1. まえがき
2. 注目あびるハツ場
3. ダム湖に沈む川原町
4. 変わりゆく長野原町
5. 白い双壁が広がる
6. 庶民が未来を創る
7. 新たな歴史がはじまる



## 注目あびるハツ場



「ハツ場」と書いて、なぜ「やんば」と呼ぶのか？ 記者もそうだったが、多くの者が疑問に思っているはずだ。

この地域は狭まった谷へ獣を追いこみ、矢を放つため最適だった。猟場は8つほどあり、猟師が呼びやすい地名に変化したらしい。（諸説あり）

昭和22年（西暦1947年）にカスリーン台風の上陸によって、利根川の堤防が決壊し、葛飾区など下町一帯は甚大な被害に見舞われた。

そこで政府は5年後の昭和27年に、ハツ場地域の調査に着手する。

昭和44年にはダム工事説明会が催され、生活再建相談所も開設される。しかし豊富な湯量で知られる川原湯温泉と、紅葉で多くの観光客が訪れる吾妻峡があったため、やがて大きな反対運動に発展したのだ。

昭和55年に群馬県が長野原市に生活再建案を示し、吾妻市に振興対策案を提示する。平成4年には基本協定が結ばれ、工事が動きはじめる。だが平成21年に民主党政権が、建設半ばで凍結を指示したのだ。

JR旧吾妻線には「日本一短い樽沢トンネル」があった。

全長は7.2mほどだ。在来線の車両は約20mなので、1両の半分にも満たない。2014年の最終運行には、多くの愛好家がラストランを見届けた。

水没区域外なので、ダム完成後も観覧できると期待したい。





令和元年6月の試験湛水前。ダム湖に沈む川原町



同年12月試験湛水後の川原町(貯水位標高 544.8m)



### 試験湛水前の自然が溢れる長野原町

国道145号線の通称ハツ場バイパスから曲がり、新設された「ハツ場大橋（湖面1号線）」で長野原町を眺める。

手前に見えるのがJR旧吾妻線の鉄橋だ。奥には「不動大橋（湖面2号線）」と道の駅「ふるさと館」が新設された。

### 試験湛水後の泥水で変わる長野原町

JR吾妻線は向かって左の高台に移設した。川原湯温泉駅は整備が進み、温泉宿も多くの観光客で賑わっていた。

だが昨年の台風19号による豪雨で、長野原草津～終点の大前駅間で不通となったままだ。



## 白い双壁が広がる



ハツ場ダム建設の目的は4つだ。まずは洪水対策である。

ダム地点ピーク流量時に、台風などの洪水を防ぐため、下流に毎秒200立方メートル放流して調節する。

台風19号では試験湛水中で満水に近づいたため放流をつづけ、早くも効果を発揮した。

他には都市用水の確保、名勝・吾妻峡の景観維持、水力発電のためだ。

「個人向けダム見学会」は、長野原観光協会が主催する人気のツアーである。専属の女性コンシェルジュがダムの歴史や治水の重要性と建設の最新技術を、ふだん立ち入り禁止の区域を同行し、案内してくれる。

「名勝吾妻峡を保つよう、ダムは予定より下流に建設しました。来年の桜が咲くころには新たな施設が次々に生まれ、ダム湖まで高速エレベーターも完成予定です。湖には北関東で初の水陸両用車も運行します」

ダム湖底に水没する地域住民は470世帯に及ぶ。試験湛水がはじまった昨年の9月末に、近隣の高台まで全世帯の移転が完了したと聞く。

師走の平日にもかかわらず、見学のマイクロバスは満席だった。小学生から70代ほどのご夫婦まで、年齢層も様々だ。

作業用の足場やスロープを進み、廃線になったJR旧吾妻線の線路をひたすら歩く。

建設中の巨大なダムが視界に広がる。積年の哀愁と希望に満ちた、まさに白い双壁だ。



## 庶民が未来を創る



川原湯温泉では観光客にもかける奇祭「湯かけ祭り」が、大寒の1月20日頃にあり、代替地では2014年から開催されている。

かつて温泉が枯れてしまい、困り果てた村人がニワトリを生けにえに拝んだところ、再び温泉が湧きあがったとの故事に由来する。

記者は見学ツアーの前後日に川原湯温泉協会に電話を入れたが、どこも満員で予約がとれなかった。

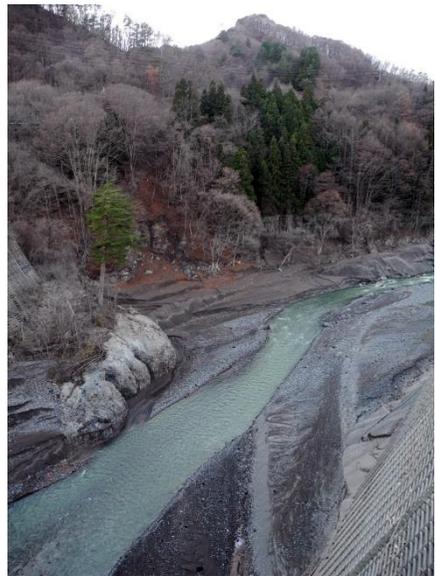
全国の市町村から視察もあり、介護施設や小中学校の移動教室など団体客も多く、個人のリピーターもかなりの数になるという。

ただ、帰路につくバスの運転手から、気になる情報も教えられた。

「台風19号の豪雨は凄まじかった。4か月程度かける予定だったのに、ダムが一夜で満水になるとは、誰も予想できなかった。下流の川原湯温泉駅ちかくでは、大量の土砂が堆積したまま、手つかずの状態だ」

自然の持つ脅威に対しては、人間が造りあげた最新技術の結晶でさえ、遠く及ばないのだろうか。

だが「情けは民のため」にある。庶民の暮らしのためにまい進すれば、明るい未来も創れるだろう。



## 新たな歴史が始まる



### 水源の不動の滝が地域を見守る

- ◆ 写真・文章・編集：隅田 昭
- ◆ 取材：令和 元年 12月3日
- ◆ 発行：令和 2年 2月9日

(出典サイト：上毛新聞・ハツ場ダム工事事務所・ハツ場あしたの会等)

本冊子の一部あるいは全部を無断で複写複製することは、  
法律で認められた場合を除き、著作権の侵害となります。